

絵画修復家の アトリエから

加賀優記子……絵画修復家

皆様、ご無沙汰しておりました。お元気ですか？

こんなにご無沙汰する予定は無かったのですが、先回号の時に大風邪を引いてしまいました。何しろ、連休中がさむかったもので……。しかし、そういう言っているうちに早いものでもう梅雨ですね。

私のアトリエでは、これから4ヶ月位が最も神経を使う季節です。何しろ大切な絵を扱うもので、大敵はカビ!!

そろそろ空調を24時間フル回転、電気代がうなぎのぼりになると反比例して私のおこづかいはいっつきに下降線を辿ります……。

カビは、はじめは絵の表面や額縁の内側のガラスにポツポツと斑点状に出てきますが、これを放っておくと絵の具の顔料を喰ってしまつて、こうしたところを修復するにはカビを完全に燻蒸してから(カビの菌は市販の殺菌剤程度では死なないのです)。その喰われて色を失った部分だけにスポット的に補彩をしなくてはなりません。

つまり、最も手間のかかる、最もオリジナル性の損なわれる直しをしなくてはならなくなるのです。ですから、これから湿気のたかい季節、くれぐれも用心を!

ところで、私が絵画と本気で関わりだして感じた事が、まず年間を通しての気候の変化というのがこんなに絵画と密接なものだったのか、というオドロキでした。

パリで修行時代、私の先生は毎朝私がニカワの湯煎鍋の火をつけて、その中に指を突っ込んで「本日のニカワの仕上がり具合」を確かめるように言いつけましたが、まず、冬と夏とはその状態がとて異なる事を実感。

ニカワは、修復では絵の具層の剥離を定着させるなどの色々な場面で使用しますが、ニカワの乾いた時の引きの強さが強すぎても弱すぎても、下手をすると絵の具を割ってしまう原因となつてしまつたため、濃度はもとよりその日の温・湿度でそ

の扱い方が全然違つてしまつたのです。

この様に、大変デリケートで、本当に扱えるようになるにはある程度習熟が必要になつてくるニカワですが、私が修復のシーンで、または絵の制作の際にも基本的には天然素材の方が化学合成物よりも優つていて、と考えるきっかけとなつたのもこのニカワに起因してました。

それは昔ルーブルではじめて大きな絵の模写の許可を取つた時の事、私は美大時代からいつも、キャンパスは生の麻布から自分でニカワの絶縁層を塗り、白地塗りをして作っていましたが、今回のこの模写のためのキャンパスはセーヌ河岸にあるセヌリエ画材店ですすめられたキャパロールという、端的に言つてしまえば木工用ボンドみたいなモノでニカワの代わりに絶縁層を塗りました。

はじめて見る物だったので、試してみたかっただけです。

ところが、これが、のびる、のびる。ほんの少しルーブルの観光客が増え、人いきりで湿度が上がると、キャンパスがものすごくたるんで描きづらくてしょうがない。ニカワでも、多少はたるみます。でもこれほどじゃなかった。

と、いうことで、今もこの絵は私の仕事場に飾つてありますが、やっぱり少し湿度が上がるとたるんでます。

そうすると、除湿機をつける、と。だからこれ

は湿度計がわりにかなり役に立っているのかな。

昔の人の知恵はエライ。合成品での代用というのは、なかなか上手くはいかないんだな、と感じたのはこれが最初でした。

日本に帰つてから、出版社の依頼で絵画の技法書をまとめる事になり、それでフナオカキャンパスの船岡社長にインタビューさせていただいたことがありました。この時も、ニカワが緩くなりすぎる(他にも早く乾きすぎる、カビが生えやすい、とか色々な事情があるのでしよう)夏場、ニカワ



ルーブル美術館にて絵画の複写中の著者

が固まってしまう冬場はニカワ引きできないんだとおっしゃっていました。

この時はご親切に、まだ私が知らなかった事を沢山理論的に教えていただきました。エキスパートつてすごいなあ。

何事も、一つの事を突き詰めて極めてゆかつて大事な事なんです。

エ? 私の本はいつ書き終るのかつて? えーと、かく言うワタクシの方はあちらこちらでアタフタしておりまして……。

今年中に書き終わるといいなあ。まだまだ、いろいろな事調べたくつてなかなか終わりません。出来上がったら、皆さん、是非見てくださいネ!

と、すかさず宣伝して、また次回! ごきげんよう!

(つづく)

かかゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。